

令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）
分担研究報告書

性差にもとづく更年期障害の解明と両立支援開発の研究 -男性更年期障害-

研究分担者 堀江 重郎 順天堂大学・大学院医学研究科泌尿器外科学・教授

（研究要旨）

高齢化が進む本邦において、中高年男性の就労支援・健康維持は社会全般で対応すべき課題である。近年、男性更年期障害やLOH(Late Onset Hypogonadism)症候群といった疾患概念は社会的に認知され始めてきたが、本邦での男性更年期障害に対する大規模な実態調査はこれまで行われていないのが現状である。

今回の研究では、男性更年期症状を有する患者に対して、タブレット端末を利用したペーシエントジャーニーを行うことで、更年期障害と就労やプレゼンティズムとの関係について明らかにする。

A. 研究目的

女性は、閉経前後での性ホルモンの急激な変化により様々な更年期症状を生じ、働いている女性にとっては就労にも影響し、仕事の継続が困難となる場合も存在する。日本では、更年期における内分泌環境の変化や精神心理的な変化が就労に与える影響について調べた研究は少なく、更年期症状と就労との関係についての認識も低い。一方、男性も男性ホルモンであるテストステロンの急激な変化により、男性更年期障害を生じる。このような症状は就労にも影響し、仕事の継続が困難となるケースも存在する。そこで、男女において症状と就労との関係を明らかにし、性差に着目した普及啓発や支援・介入を検討する際の基礎資料を作成することを目的とする。

初年度は、更年期障害と就労やプレゼンティズムとの関係について国内外のエビデンスを収集・整理した。また、レセプトデータを用いて、男女それぞれの更年期障害の受診割合や治療割合、新規受診率を調べ、更

年期障害とプレゼンティズムの関係を明らかにした。

2年目は、①更年期障害を有する就労女性の医療施設を受診するまでのジャーニーを明確にし、治療による女性更年期障害と労働機能障害との関係を明確にする（安井、岩佐、甲賀）、②更年期障害を有する就労男性のペーシエントジャーニーを明らかにするためのWEBシステムを開発し、男性更年期障害と労働機能障害との関係を明確にする（堀江、井手）、③レセプト調査、ネットアンケート調査、事業所調査によって、更年期症状とプレゼンティズムとの関係や更年期障害に影響する職業関連因子を明らかにするとともにNDB調査にも着手する（藤野、立石、村松）、これらの結果を踏まえて④両立支援についての普及活動や支援・介入のための資料の作成に着手する（熊野）、⑤更年期障害患者が両立支援を希望する場合の阻害要因と促進要因について国内の制度を概観することにより、次年度以降の事業場調査の基礎資料とする（立石）ことを目

的とする。

3年目は、これらの研究を継続するとともに、得られた結果について速やかに学会発表や論文を進めるとともに、これまでの研究成果をもとに、性差に着目した両立支援に関する普及啓発や支援・介入を検討する際の基礎資料を作成する。

B. 研究方法

2022年11月から2024年1月の間に男性更年期症状を主訴に順天堂医院泌尿器科を受診された患者計96名を対象とした。

タブレット端末を使用し、Google form上での自己回答式問診を施行し解析を行った。(倫理面への配慮)

本研究参加者には、研究目的、方法、参加は自由意志で拒否による不利益はないこと、及び、個人情報保護について、説明を行った上で、書面での同意を得た。

順天堂大学医学研究科倫理委員会での承認を得て本研究は行われた。(H22-0403)

C. 研究結果

男性更年期障害の外来調査・ペイシエントジャーニー調査を行った。患者背景は、以下のとおりである。総テストステロン値の中央値は4.04 ng/ml (0.66-9.74)、遊離テストステロン値の中央値は6.8 pg/ml (1.9-15.5)であった。年齢の中央値は54歳 (27-76)、BMI (Body Mass Index) の中央値は24.1 kg/m²であった。職種はデスクワークが64%、営業・販売職が20%、肉体労働が17%であった。精神科受診歴有は29%であった。AMSによる症状程度分析では、軽症21%、中等症40%、重症33%であり、64%はテストステロン低値でLOH症候群と診断された。

受診のきっかけは自らの判断が37%、医療機関からが59%であった。受診のきっかけは自らの判断が37%、医療機関からの紹介が59%であった。自覚症状として、睡眠の質の低下、意欲低下、集中力の低下、性欲の低下、勃起機能の低下、不安が大多数に見られた。総テストステロン値が2.5 ng/ml以下の患者は、2.5 ng/ml以上の患者に比べて有意にSDSの合計点が高かった。労働機能障害評価尺度であるWFunと男性更年期障害の症状調査票であるAMSの間に強い相関がみられ、労働機能障害と男性更年期障害には密接な関係があることが今回初めてわかった。受診により46%に症状の改善が見られた。テストステロン補充療法により70%で症状が改善した。

D. 考察

今回の調査では、男性更年期症状で受診した患者の約7割で男性ホルモン値の低下を認め、男性更年期症状と男性ホルモン値に何らかの関連がある可能性が示唆された。

問診結果からは、総テストステロン値が2.5 ng/ml以下の患者は、2.5 ng/ml以上の患者に比べて有意にSDSの合計点が高く、男性ホルモン値とうつ病には関連があることがわかった。また、AMSとWfunに有意な相関がみられ、男性更年期患者がプレゼンティズムと強く関連している可能性が考えられた。

E. 結論

タブレット端末を利用した自己回答式問診は、ペーシエントジャーニーを簡便に把握できるツールと言える。総テストステロン値は、うつ症状を有意に反映するバイオ

マーカーとなりえる。また、男性更年期はプレゼンティズムと強く関連していることがわかった。今後は全国的な Web 調査を行うことで、男性更年期障害の大規模実態調査を行うことが求められる。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし。

2. 学会発表等

第24回日本抗加齢医学会総会で発表予定（2024年5月31日）

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし。